

# わたしの原風景

2

## 最上一平

もがみ いっぺい / 児童文学作家



イラスト／石川えりこ

二〇二〇年に東京オリンピックが開催されるという。「東京オリンピック」と耳にした目にした目になると、私は一九六四年に行われた東京オリンピックを思い出してしまう。

その時、私は小学一年生だった。山形県の山間の貧しい農家の我が家には、まだテレビがなかった。そんなこともあり、リアルタイムでのオリンピックの記憶はなにひとつない。素足の王者アベベや田谷、東洋の魔女……など、強く印象に残っているのは、何年後かに観た市川崑監督の記録映画「東京オリンピック」に感動したからだった。

一九六四年の東京オリンピックは、十月十日から開催日である。だから、この期間中に父は死んだことになる。命日は十月十五日。もはや父の顔さえさだかではない。

でも、その夜のことは、結構はっきりと覚えている。こたつに寝ていた私は、誰かに起こされて、父の寝ていた納戸につれていかれた。親戚の人や村の人が集まっていた。母が父の枕元で、人の目もはばからず、顔中ぐちゃぐちゃにして、大声で泣いていた。

母は筋金入りの百姓女である。男にも負けず力仕事をする。病気など一度もしたことがない働きの強い女だった。泣く姿など、思いもよらぬことだった。息が止まるほど驚いた。母が泣いている。父が死んだという悲しみはなく、ただただ、母が泣いていることが恐ろしくて身動きもできなかった。そうしていると誰かが、私の手を取って、ぬれた脱脂綿で父の口元をふいた。末期の水であったのだろう。

父は三十四歳だった。私にとって、父の死は、母の泣いている姿である。これが私の一番遠くにある記憶で、ここから私というものが始まっているようだ。この風景に、年とともにいろいろな風景を重ねてきたわけだが、考えてみれば、私の土台といえるだろう。母の泣く姿は私にとって、おきあがりこぼしの底についている石のようなものだったかもしれない、今にして思う。

二度目の東京オリンピックが、年老いた母にも私にもやってくる。